

# 児童がつくうそと親子関係

○小島和也<sup>1</sup>・石野陽子<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>島根大学教育学部学校教育課程 I 類・島根大学教育学部)

## 目的

子どもの嘘をつくという行為が親子関係の在り方とどう関連しているのか、親子関係が児童の嘘にどう影響しているかを明らかにすることで、児童の「うそ」が親子関係によって変化するものなのか、または、系統が見られるのかを分析する。本研究では、卒業研究の予備調査として、アンケート調査を行い、児童の「うそ」の認識について分析した。

## 方法

**対象者**：学童保育施設に所属する第1学年（10名）・第2学年（12名）・第3学年（6名）・第5学年（2名）の児童施設を対象とした。有効回答は男子22名、女子8名である。

**調査期日**：2017年11月6日に実施した。

**調査項目**：児童にとって「うそ」がどのように認識されているかを測る質問項目を11項目と「うそ」を用いる場面を挙げ、その場面の経験、認識を測る質問項目を15項目を用いて26項目で構成した。この項目群について「a. とてもそうおもう、b. まあまあそうおもう、c. あまりそうおもわない、d. あまりそうおもわない、e. わからない」の5件法と「a. よくある、b. まあまあある、c. あまりない、d. まったくない」の4件法による回答を求めた。これに加えて、「親子関係の親密さ」尺度：山崎・杉村・竹尾（2002）を参考に、児童の親に対する価値観を測る項目（20項目）と児童と親の関係性を測る項目（21項目）の回答を求めたが、対象者の集中力の散漫や回答の困難が見られたため、調査を中断した。

## 結果と考察

「うそ」がどのように認識されているかを測る質問項目を度数テーブルから検証した。「うそをつくことは、わるいことだとおもう」という質問項目に対して「a. とてもそうおもう」が全体で86.7%という結果が出た。そこから、目的が明確になっている状態で「うそ」をつくという行為には、「d. まったくおもわない」の割合が高く、こういった場合の「うそ」を肯定していなかった。

その中で、「うそ」をつくことを全体的には悪いと捉える傾向にありながら、危険や注目を避ける

ため、逃避のために「うそ」をつくことに関しては、肯定する傾向にあるとわかった。

また、「うそ」を用いる場面を挙げ、その場面の経験、認識を測る質問項目では、全体では「d. まったくない」とする傾向にある。その中で、親や友達に対して「うそ」をつくという場面は「a. よくある」と回答する児童の割合が増加する。調査対象者の学年の割合として、第1学年、第2学年の低学年の割合が高いことから、低学年の児童は、「うそ」をつくという行為は、基本的に悪という認識を持っているが、自己を中心的に考えたうえでは「うそ」をついてもよいと考えるようになりつつあると考える。

「お父さんやお母さんが、うそをついたとわかれると、どんなうそでもいやなきもちになる」という質問項目では、「a. とてもそうおもう」が76.7%であった。このことから、児童から見る親の発言が児童に影響を与えることが分かった。児童が親に対して「うそをついた」と感じたとき、不快な感情を生まれるということは、児童が「うそ」を強く認識するようになればなるほど、親に対して不快な感情を抱くようになりやすくなることが考えられる。

ここから、児童からの視点で親子関係をどう捉えているかと児童の「うそ」の認識、「うそ」の種類の関係性を明らかにすることで、児童がつく「うそ」から考えることができる親子関係を見出すことができると考える。

今回の予備調査では、親子関係を測る質問項目の調査ができなかったため、児童の「うそ」との関係性について分析ができなかった。また、調査をするなかで、低学年が主になったことから、調査対象者が回答に困難を感じる項目があった。そのため、質問項目をもう一度選定する必要がある。本調査では、質問項目を見直したうえで、調査対象者の母数を増やし、親子関係を測る質問項目を含めた質問紙による調査を行うことが求められる。そして、因子分析を行い、分析することが必要である。